

台湾における歴史的鉄筋コンクリート造建物の保存活用戦略に関する調査研究

京都大学 荒木慶一



地震国である台湾では、1999年の集集地震以降、近現代建築物の保存活用の取り組みが急速に進んでおり、産官学が連携してこの困難な課題を実行し、民間のノウハウや資金を活用して成果を上げている。特に日本統治期（1895–1945年）に建設された建築物は、築約100年～80年が経過する中、地域の歴史の中心的建物として現代のニーズに沿った活用がなされているが、台湾はどのような政策、取り組み、マネジメント手法等によって保存活用事業を促進しているのだろうか。今後、我が国において急増する築年数50年を超える近現代建築物の保存活用を考えたとき、台湾の先駆的事例の保存活用メカニズムを整理しておくことは重要である。

そこで本研究では、日本統治期（1932年（昭和7年））に建設され、2013年に保存活用事業が完了し、まちのコミュニティの中心として維持されている「林百貨店（台湾台南市中西区）」の事例に焦点を当て、当該建物の歴史的背景を整理するとともに、保存活用事業においてどのような価値判断がなされたのか検討を行った。また建築が内包する様々な「価値」のうち、文化的価値、歴史的価値、デザイン価値を明らかにすることで、建物の持つアイデンティティがどの程度再現されたのか、それに係る事業主体の意識と負担感を整理することで、我が国における近現代建築物の保存活用の促進に資する知見を得た。

本研究では、台湾台南市における林百貨店の保存活用事例に焦点を当て、保存活用事業が促進していった経緯、官民連携のノウハウ、資金調達の手法などについて関連資料¹⁾を元に整理するとともに、実際に保存活用事業を行った建築設計事務所からの提供資料²⁾と、デザイン設計を行った建築家である徐夕健氏へのヒアリング調査（図1）から、当該建物における文化的価値、史的価値、地域的価値、活用価値に関するデザイン再現の判断プロセスを明らかにした。加えて、それらの判断がどのように設計デザインへ展開されたのか、図面分析から整理することで近現代建築物を保存活用する際の文化的価値の保全に対する知見を得た。

なお、昨年度に実施した現地でのヒアリング調査に基づく分析は現在も継続して実施している。これらの分析結果をふまえて、2025年7月に再度、徐夕健建築事務所を訪問してヒアリングを行うことを計画している。

参考文献

- 1) 栢木まどか、伊藤裕久：台南末廣町店舗住宅にみる共同建築の計画的特徴—台湾における日本統治期の亭仔脚付街屋の街並形成と共同建築に関する研究—、2020年度日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ、2021年3月
- 2) 徐夕健：徐建築設計事務所提供資料「古蹟再利用中「故事場景」的敘事性規劃策略以台南「林百貨店」古蹟為例」（「遺跡の再利用における「ストーリーシーン」のナラティブな計画戦略台南の「林百貨店」遺跡を例として）



図1 徐夕健建築事務所でのヒアリングの風景